

芦屋大学論叢 第85号

(令和8年3月22日)抜刷

《研究ノート》

グループレッスンと個人レッスンを併用した
ピアノ実技指導の試み

石 田 愛 子

《研究ノート》

グループレッスンと個人レッスンを併用したピアノ実技指導の試み

石 田 愛 子
芦屋大学臨床教育学部

1. はじめに

本学児童教育学科では長年、ピアノ実技科目「器楽」において複数教員による個人レッスンを行ってきたが、教学組織改革の一環として2025年度より授業形態を変更することになった。ピアノ実技は、大学入学前の学習経験の有無による個人差が大きいことから、レベルの異なる学生の一斉指導は難しい面がある。一人一人の適性や克服すべき課題が異なるため、ピアノ実技指導には個人レッスンが最も望ましいと考えられるが、レッスン形態に関する学生側の意識調査はこれまで行ってこなかった。2025年度前期、筆者が単独でグループレッスンと個人レッスンの併用を試みた「器楽Ⅰ」と「器楽Ⅲ」について、履修学生を対象にアンケート調査を実施した。また、2025年度後期中盤に「器楽Ⅱ」についてもアンケート調査を実施した。本稿では、ピアノのレッスン形態に関する学生の意識や要望を明らかにするとともに、2025年度の試みを検証し、グループレッスンと個人レッスンそれぞれの有効性と課題について考察する。

2. グループレッスンのための環境整備

楽器の習得においては個人レッスンが最も一般的かつ効果的な学習形態であると考えられるが、特にピアノに関しては環境的な要因も大きい。本学には伝統的な「ピアノレッスン室」、つまり個人練習を主目的とする、アップライトピアノ1台だけが置かれた個室は多くあるが、電子ピアノが数十台並ぶ、ピアノの一斉指導ができるような大部屋がなく、個人レッスン以外の形を検討する余地がなかった面もある。

筆者は以前、「保育内容Ⅵ（表現—音楽リズム）」の授業で芦屋学園短期大学にあった「クラビノーバ室」（「ヤマハ ミュージックラボラトリー」というシステムの旧型）を借用した際、ピアノを「みんなで練習する」ことの効果を実感した¹⁾が、本学にこのような設備を新規に導入するには莫大な費用がかかる。そこまで複雑な機能を搭載せずとも、最低限、学生人数分の楽器（キーボード）と、教員の手元鍵盤や楽譜を映し出すための書画カメラとスクリーンがあれば、グループレッスンは可能である。

2025年度より「器楽」の授業形態を変更するにあたり、一斉指導（グループレッスン）ができる環境を整えるべく、多目的に使用される「Bホール」に比較的軽便なキーボード²⁾12台を並べ、教員の手元鍵盤を写す書画カメラ³⁾をピアノ上に設置して、プロジェクタで壁面に投影するようにした（図1, 2）。



図1 グループレッスンのレイアウト



図2 教員の手元鍵盤を投影した壁面

3. レッスン方法

一斉指導ができる B ホールと、個別指導用のピアノレッスン室は近接しているため、①教員による課題曲の範奏と解説（一斉指導）、②奏法と練習方法を確認しながら、キーボードを用いた全体練習（適宜、歌唱や楽典、分奏などを取り入れる）、③学生のレベルや希望など状況に応じてピアノレッスン室に移動し、ピアノを用いた個人練習、④教員の巡視とアドバイス（個別指導）、以上の手順を適宜組み合わせることが可能になった。

②のキーボードを用いたグループレッスンでは、互いに聴き合う経験とコミュニケーションを大切にしたいと考え、ヘッドホンを用いた個人練習の時間は設定しなかった。全体練習に全くついていけないレベルの学生や、どうしても周りの音が気になって練習できない学生がいた場合は、ピアノレッスン室での別室対応もできるようにしたが、幸いそのようなケースは発生しなかった。

3.1 「器楽Ⅲ」

2 年次前期の「器楽Ⅲ」は、保育士課程必修、幼稚園教育実習参加要件科目である。1 年次の「器楽Ⅰ・Ⅱ」でピアノの基礎技術を習得したうえで、保育の場にふさわしい歌のレパートリーを広げ、伴奏付けと弾き歌いができるようにするため、毎回 2～3 曲の課題曲を指定している⁴⁾。グループレッスンでは、全員で階名唱と歌詞唱を行ったのち、コードネームを確認しながら伴奏付け練習を行い、男子はピアノ、女子は歌唱、またその逆など、役割分担して互いの音や声を聴き合う練習を取り入れた。第 10 回まで「週替わり課題」をグループレッスンで練習し、10 回目にクラス内発表会の形で中間試験を行ったのち期末試験の課題曲を発表、2 回のグループレッスンを経て、試験に向けてラスト 3 回は個人レッスンを行った。

3.2 「器楽Ⅰ」

1 年次前期の「器楽Ⅰ」は、保育士課程、小学校教職課程の必修科目である。ピアノ学習経験がなく不安を感じている学生も多いため、入学直後は特にきめ細かな個別指導が必要になる。ピアノ経験のある学生にも対応するため、4 段階のレベル（ビギナー、ベーシック、ベーシックプラス、アドバンス）の課題曲リス

トを設定しているが、2025年度は履修者が少ないうえ全員ほぼ初心者であったため、一斉指導がしやすい環境となった。ビギナー向けの課題である「ステップ1～10」⁵⁾の課題曲を順にクリアしていく形で第10回までグループレッスンを行い、「器楽Ⅲ」と同様、10回目にクラス内発表会の形で中間試験を行ったのち期末試験の課題曲を発表、2回のグループレッスンを経て、試験に向けてラスト3回は個人レッスンを行った。

3.3 「器楽Ⅱ」

1年次後期の「器楽Ⅱ」も、保育士課程、小学校教職課程の必修科目である。「器楽Ⅰ」に引き続き「ステップ11～20」を順にクリアしながら、主要三和音を用いた和音付けや移調奏もできるようにしていく。全員ほぼ初心者からのスタートであった1年生も、半年を経過して少しずつ進度に差がついてくる時期であるため、前期よりも個人レッスンの回数を大幅に増やした。一方、学生同士の関係性が深まる時期でもあり、「たまにはみんなで一緒にやりたい」という声や、周りの進捗を気にする声も聞かれるため、概ね「3回の個人レッスンののちグループレッスン」のサイクルで月に一度グループレッスンを行い、互いに弾き合い聴き合う機会を設けるようにした。

4. アンケート調査

4.1 調査の方法

アンケート調査の実施時期と対象者は次のとおりである。

「器楽Ⅲ」：2025年7月29日(火)2時限目(期末試験終了後10分程度)、児童教育学科2年生10人

「器楽Ⅰ」：2025年7月29日(火)3時限目(期末試験終了後10分程度)、児童教育学科1年生4人

「器楽Ⅱ」：2025年12月2日(火)2時限目(中間試験終了後10分程度)、児童教育学科1年生4人

いずれも無記名で質問紙に回答する形で行い、対象者全員から回答を得た。実施にあたっては、アンケートの目的と倫理的配慮(成績評価には一切影響しないこと、回答の集計・分析、結果の公開にあたり個人が特定されたり回答者が不利益を被ることは一切ないこと)を説明し、了承を得た。

4.2 調査の内容

質問した内容は主に次の3点である。

- (1) グループレッスン、個人レッスンについて感じたこと
- (2) この科目を履修して身についたと感じること
- (3) ピアノや弾き歌いについて、難しいと感じること

上記(1)について、2025年度前期に「器楽Ⅲ」を履修した2年生は、1年次(2024年度)に「複数教員による完全マンツーマンレッスン」を経験していることから、個人レッスンとグループレッスンを比較しやすいと考えられるため、「グループレッスンを受講してどのように感じたか」を中心に質問した。2025年度前期に「器楽Ⅰ」を履修した1年生には同様の質問に加え、「個人レッスンについて、良いと感じる点」について自由記述の回答を求めた。2025年度後期に「器楽Ⅱ」を履修した1年生には、前期と比較した個人レッスンの回数の変化についても質問した。

5. 結果と考察

5.1 グループレッスンについて

「グループレッスンを受講して、どのように感じたか」という設問には、13の項目について5段階（大変あてはまる=5、あてはまる=4、どちらともいえない=3、あまりあてはまらない=2、全くあてはまらない=1）の択一式とした。

5.1.1 「器楽Ⅲ」の場合

図3にその結果を示す。「器楽Ⅲ」を履修した2年生の半数以上が、「個人レッスンより緊張せず、気楽だと感じた」「友だち同士で教え合うことができた」「みんなで歌えるので楽しいと感じた」「90分の授業時間を有効に使えた」の項目について「大変あてはまる」または「あてはまる」を選択した。気楽さ、楽しさ、教え合いなど、グループレッスンならではの良さを感じた学生が多かったことがうかがえる。弾き歌いをメインとする「器楽Ⅲ」では歌唱の練習も含むが、教員と差し向かいで一人で歌うよりも、みんなで一緒に歌うほうが楽しいであろうことは容易に想像がつく。

レッスン環境については、「キーボードとピアノの違いが気になった」学生が9割に上り、1年次の個人レッスンでアップライトピアノに慣れた2年生にとっては、電子楽器の鍵盤の軽さやタッチの違和感が大きかったことがわかる。個人レッスンのメリットは、教員の範奏を間近で見聞きでき、わからないことをすぐに質問できることであるが、今回グループレッスン用に導入した「教員の手元を写すモニター」については「わかりやすかった」と「どちらでもない」が同率4割、グループレッスンで「教員に質問しづらい」と感じた学生は少数ではあったが、ゼロではなかった。

個人レッスンのデメリットとして待ち時間の問題があり、2024年度までの完全マンツーマンレッスンでは学生一人あたりのレッスン時間は20～25分程度と充実していたが、受講前後の待ち時間には交代でピアノレッスン室を使わなければならなかった。一人一台のキーボードが使えるグループレッスンでは楽器が空くのを待つ必要がないため、「90分をフルに使える」のは大きなメリットといえる。

グループレッスンでは、ひとつの課題について全員がほぼクリアできた段階で一人ずつ順に弾く機会を設けたが、「人前で弾くことに慣れた」と感じたのは4割であった。個人レッスンよりも他人との比較が生じがちであるため、半数が「人の演奏を聴いて不安やあせりを感じた」としている一方、「友だちの演奏を聴くことが学びにつながった」と感じた学生はそれよりやや少なかった。同じ曲を同じ楽器で弾いても、人によって音色や表現が異なるところに面白さがあり、互いの演奏を聴き合うことが励みや学びにつながることを期待したが、ほとんどの学生は自分がまず弾けるようになるための練習に手一杯で、他の人の演奏に耳を傾け、そこから何かを感じとるだけの余裕がなかったものと考えられる。

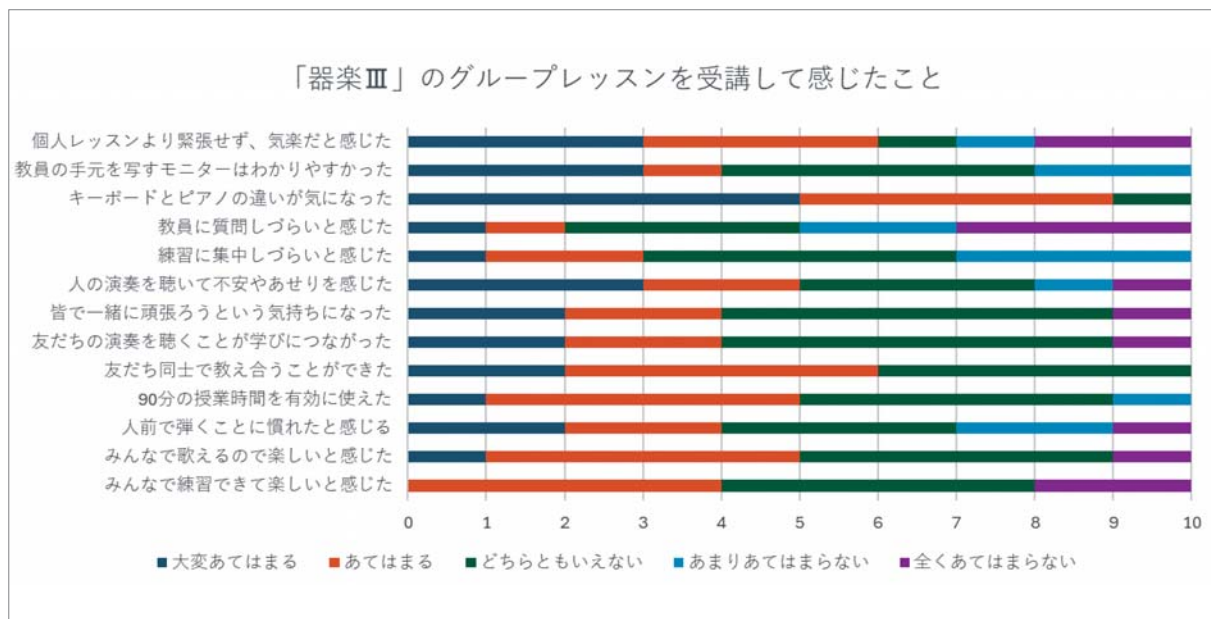


図3 「器楽Ⅲ」のグループレッスンを受講して感じたこと

5.1.2 「器楽Ⅰ」の場合

図4にその結果を示す。「器楽Ⅰ」を履修した1年生全員が「大変あてはまる」または「あてはまる」を選択した項目は、「みんなで一緒に頑張ろうという気持ちになった」「みんなで練習できて楽しいと感じた」「90分の授業時間を有効に使えた」「他の人の演奏を聴いて不安やあせりを感じた」であった。ピアノについての不安やあせりはあるものの、グループレッスンについては概ね肯定的である。「教員の手元を写すモニター」については3/4の学生が「わかりやすかった」と回答した。

1年生はピアノレッスンそのものが初めての学生が多く、2年生のように比較対象がないため、「個人レッスンと比較して気楽だと感じる」学生は少なく、「人前で弾くことに慣れた」と感じるにはまだ経験が不足している。1年生でも半数の学生が「キーボードとピアノの違いが気になった」としているが、2年生ほど顕著な傾向ではない。「練習に集中しづらい」「教員に質問しづらい」と感じた学生の比率は、1年生のほうが明らかに2年生より低かった。1年生のほうが少人数で時間的・空間的な余裕があり、教員もより頻回に巡視ができたためと考えられる。

5.1.3 「器楽Ⅱ」の場合

図5にその結果を示す。前期の「器楽Ⅰ」の回答と比較すると、「人前で弾くことに慣れた」「友だちの演奏を聴くことが学びにつながった」と感じる学生が大幅に増えている。同等レベルの少人数クラスのため、過度に緊張することなく人前で弾く経験を積むことができ、互いの演奏に関心を持つ心と耳が養われてきた結果であると考えられる。全体の傾向に大きな変化はみられないが、「大部屋より個室での練習のほうが性に合う」と感じるようになった学生がいるものとみえ、「みんなで練習できて楽しい」と感じる学生が微減、「練習に集中しづらい」と感じる学生が微増している。

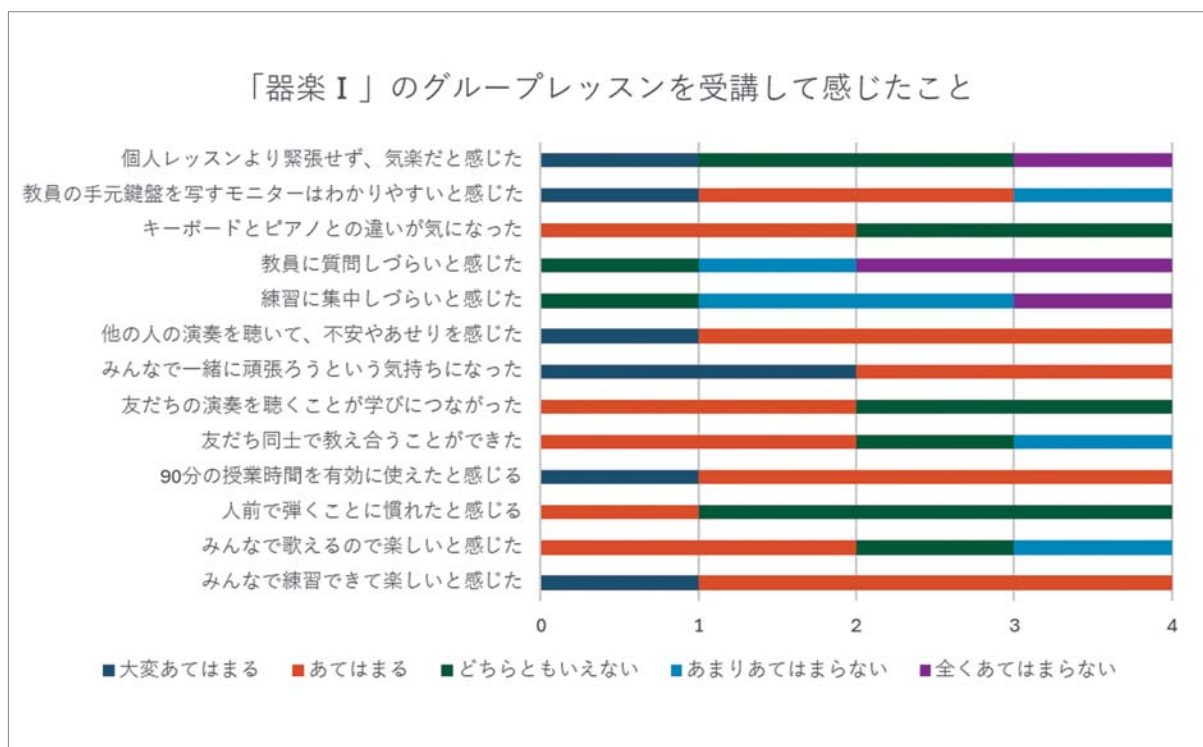


図4 「器楽Ⅰ」のグループレッスンを受講して感じたこと

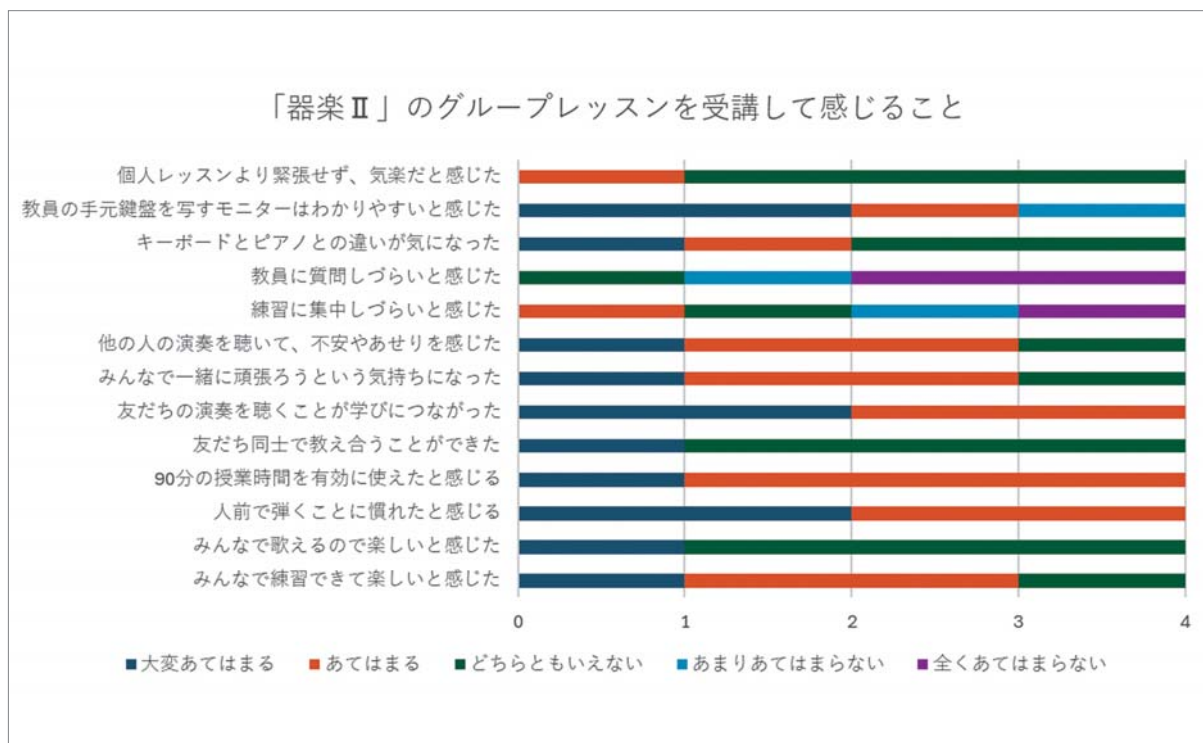


図5 「器楽Ⅱ」のグループレッスンを受講して感じること

5.2 個人レッスンについて

5.2.1 期末試験前3回の個人レッスンについて

2025年度前期、「期末試験前に設けた3回の個人レッスンについて、どのように感じたか」という設問には、5段階（多すぎる、多い、ちょうどよい、少ない、全く足りない）の択一式とし、「ちょうどよい」以外を選んだ人には「何回ぐらい個人レッスンがあればよかったと思うか」を質問した。

「器楽Ⅲ」の2年生は7割が「ちょうどよい」と回答したが、残りの3割は不足を感じており、2割の学生が「全部個人レッスンがよかった」と回答した（表1）。「器楽Ⅰ」の1年生は3/4が「ちょうどよい」と回答したが、1/4は「もう少し多くてもよかった」と感じていたことがわかった（表2）。

表1 「器楽Ⅲ」の場合

選択肢	多すぎる	多い	ちょうどよい	少ない	全く足りない
回答者数	0	0	7	2	1
希望する回数			—	5回、全部	全部

表2 「器楽Ⅰ」の場合

選択肢	多すぎる	多い	ちょうどよい	少ない	全く足りない
回答者数	0	0	3	1	0
希望する回数			—	4～5回ぐらい	

5.2.2 個人レッスンとグループレッスンを3：1の割合で交互に行った場合

2025年度後期の「器楽Ⅱ」では、個人レッスンを3回連続で行ったのちグループレッスンを概ね月一回のペースで行い、アンケート調査実施日（第10回）時点でグループレッスン4回、個人レッスン6回となった。グループレッスンで複数の課題曲の範奏と解説、練習方法の確認を行い、続く3回の個人レッスンで各自練習した成果を次のグループレッスンで発表し合うようにした。

「前期よりも個人レッスンの回数が増えたことについて、どのように感じるか」と質問したところ、全員が「ちょうどよい」と回答した。

5.2.3 「個人レッスンの良いところ」

1年生を対象に「個人レッスンについて『ここが良い』と感じる点」を質問したところ、次のような回答が得られた。（自由記述で全員が回答、原文ママ）

・「器楽Ⅰ」前期末時点

自分のペースでできる／自分の弾いている音が分かる／他の人の音に気を取られないで集中できる／キーボードではなく、ピアノを使えるところや、先生と一対一でレッスンできるのが良い

・「器楽Ⅱ」後期中盤

自分のペースで練習できる／周りを気にせず、自分に合わせてレッスンできる点／他の人の音が聞こえづらいので自分の練習に集中できる／個人で練習できるから、緊張せず、ゆっくりできるのが良い

5.3 「器楽」を履修して身についたと感じること

「この科目を履修して、身についたと感じること」については、6つの項目について5段階（とても思う=5、そう思う=4、どちらともいえない=3、あまりそう思わない=2、全くそう思わない=1）の択一式とした。

5.3.1 「器楽Ⅲ」の場合

図6にその結果を示す。「器楽Ⅲ」を履修した2年生の7割以上が「とても思う」または「そう思う」を選択した項目は、「子どもの歌のレパートリーが増えた」「楽譜を読む力がついた」「練習のしかたが理解できた」であった。「器楽Ⅰ」から1年半のピアノ学習を通して読譜力が向上し、練習方法を理解できたことは、今後の継続的な学習の礎になるものと期待される。しかし、「コードネームについて理解が深まった」のは半数、「弾き歌いのスキルがアップした」のは4割にとどまっており、保育に必須のスキルである「弾き歌い」の難しさを感じている学生が多いことがわかる。

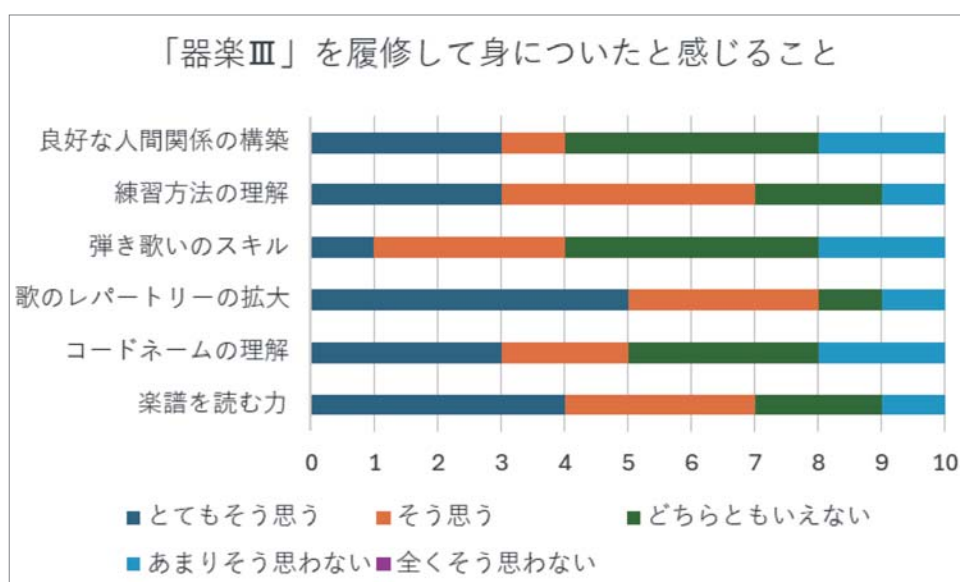


図6 「器楽Ⅲ」を履修して身についたと感じること

5.3.2 「器楽Ⅰ」および「器楽Ⅱ」の場合

図7に示すように、「器楽Ⅰ」を履修した1年生全員が「とても思う」または「そう思う」を選択した項目は、「ピアノのスキルがアップした」「ト音記号の楽譜を読む力がついた」「練習のしかたが理解できた」であった。図8に示すように、「器楽Ⅱ」では上記3項目について「とても思う」の割合が増えている。また、「ヘ音記号の楽譜を読む力がついた」について「とても思う」を選択した学生は「器楽Ⅰ」ではいなかったが、「器楽Ⅱ」では半数に増加している。

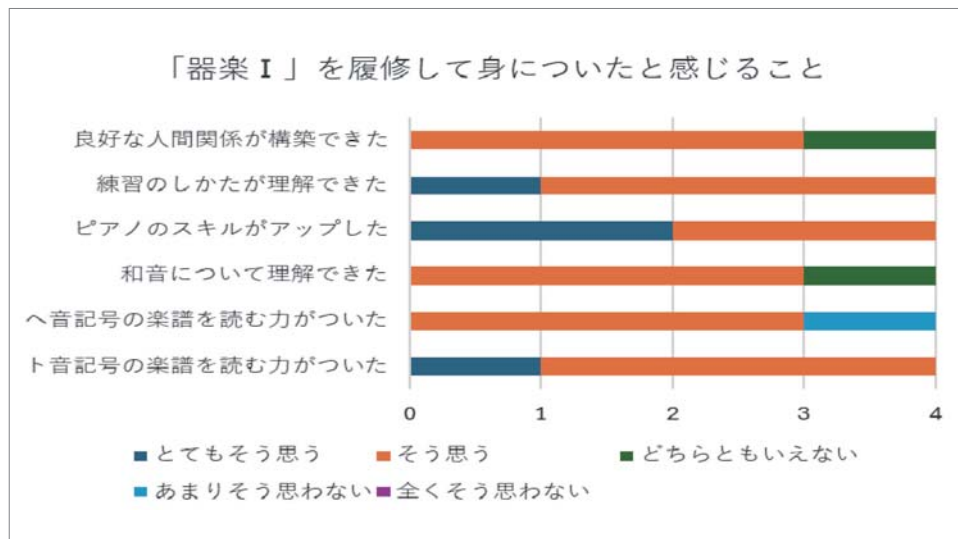


図7 「器楽Ⅰ」を履修して身についたと感じること

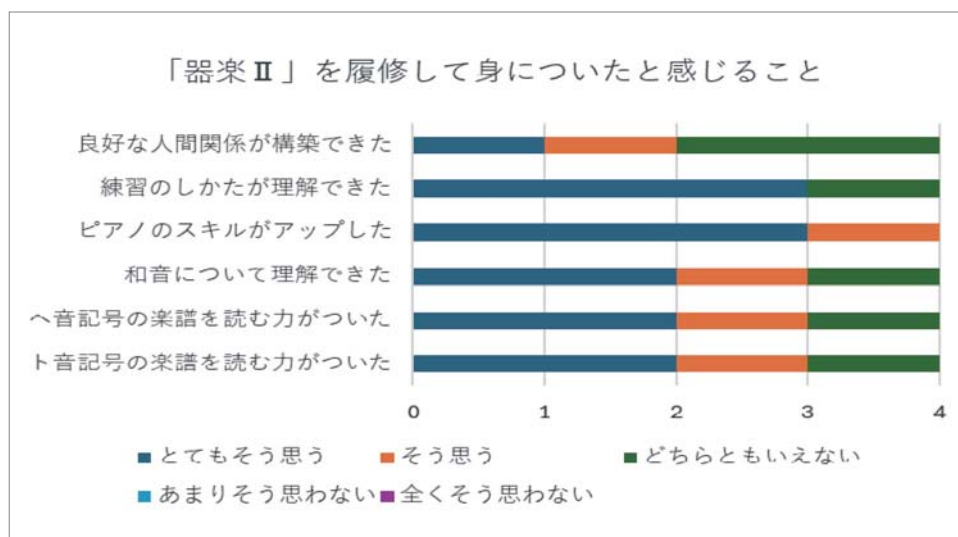


図8 「器楽Ⅱ」を履修して身についたと感じること

5.4 ピアノや弾き歌いについて、難しいと感じること

「器楽Ⅲ」では弾き歌いについて、「器楽Ⅰ」と「器楽Ⅱ」ではピアノについて、「難しいこと、困っていること」としてあてはまるものを全て選択する形で回答を求めた。

5.4.1 「器楽Ⅲ」の場合－弾き歌いについて

楽譜を正しく読み、その音の鍵盤を目と指で確実に捉え、その音を聴きながら正しい音程と歌詞で歌唱する「弾き歌い」は難易度が高く、相当の練習を要するものである。図9に示すように、ほとんどの学生が「同時に複数のことを行う難しさ」を感じていることがわかる。適切な「歌いだしの合図」には拍子感とリズム感が必要であり、ピアノ伴奏の簡略化には楽典の知識も必要である。「歌うことがはずかしい」という気持ちは子どもたちの前では問題にならないことが多い。3年次の幼稚園教育実習までに、弾き歌いのスキルを少しでも向上させられるよう、今後の努力を期待したいところである。

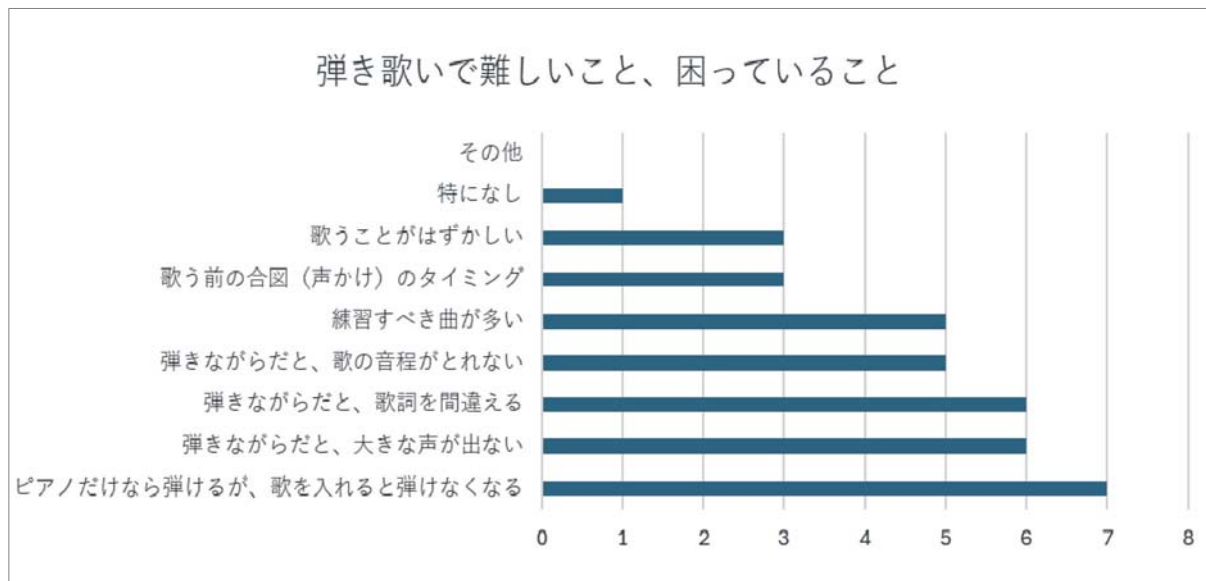


図9 弾き歌いで難しいこと、困っていること

5.4.2 「器楽Ⅰ」および「器楽Ⅱ」の場合ーピアノについて

初心者にとってピアノの難しさは、両手がそれぞれちがった動きをすること、楽譜を読むこと、の2点が挙げられる。図10に示すように、多くの学生が譜読みと両手奏の難しさ、緊張や不慣れな練習による手や腕の疲れを感じていることがわかる。「器楽Ⅰ」と「器楽Ⅱ」で大きな変化はみられないが、「器楽Ⅱ」のほうが「音を読むのに時間がかかる」「音の長さやリズムがわからない」が増えているのは、課題曲の難易度が上がったためと考えられる。

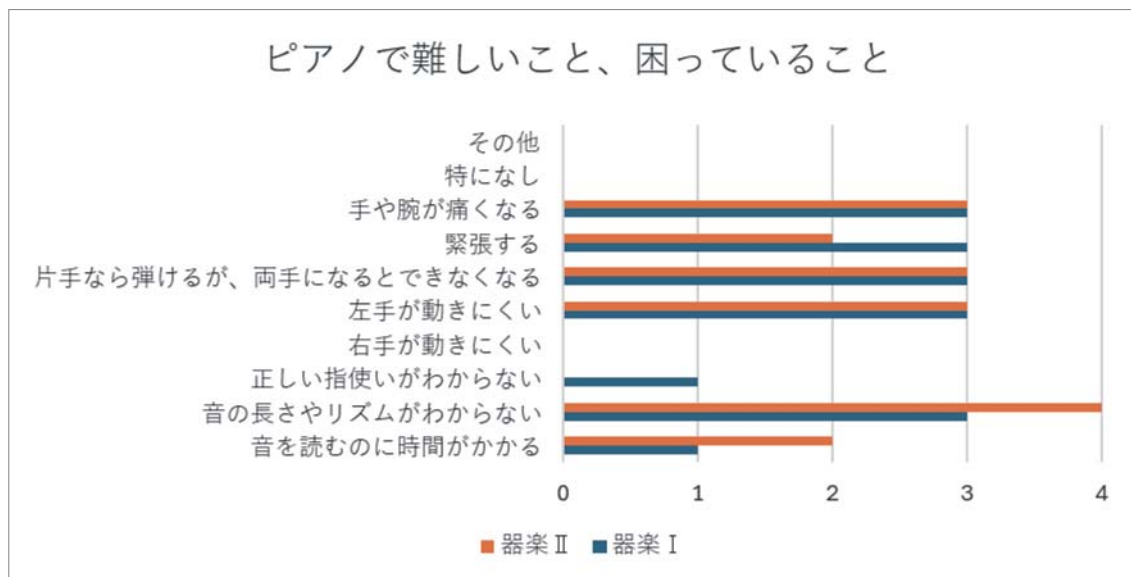


図10 ピアノで難しいこと、困っていること

6. まとめ

今回のアンケート調査はごく少数の学生を対象にしたものではあるが、ピアノ実技科目において「学生は個人レッスンを望んでいるのか？」という問いに対しては、「望んでいる学生が多い」ことが示された。

2025 年度に試みたグループレッスンと個人レッスンを併用したピアノ実技指導は、学生の満足度、到達度ともに一定の成果があったと考える。グループレッスンについての満足度が 2 年生よりも 1 年生で高かったのは、学習内容がより基本的で、学生間のレベルに大きな開きがなく、何よりも少人数であったためと考えられる。グループレッスンは、人数や男女比、各人の到達度、メンバーの人間関係など、さまざまな要素が影響すると考えられるが、2025 年度の「器楽Ⅰ」「器楽Ⅱ」は今回の試みに最適な条件であったといえる。

グループレッスンで皆一緒に練習することは、多くの学生にとってプレッシャーの軽減につながり、お互いに聴き合ったり教え合ったりする効果が認められた。しかし、一人一人の問題点や到達度をきめ細かくチェックするにはやはり限界があった。2024 年度までの複数教員による個人レッスンでは、学生一人あたり 20～25 分間そばに付いて練習を見守ることができたが、一人の教員が複数の学生を見る場合、一巡目にまず演奏をチェックしアドバイスし、できるようになるまで練習しておくように指示して次の学生のもとに向かい、二巡目に練習の成果を確認する、という流れになる。人数が多くなるほど一人あたりの時間は短くなり、きめ細かい指導は難しくなる。

レッスン形態にかかわらず、個人練習で自分の課題に向き合うことは、全ての学生にとって重要である。できるようになるまで練習するのは本人が努力するほかなく、練習方法を理解して一人で練習することは、自立心や集中力を養うことにもつながるが、隣に座って手本を見せ、じっくり見守ることが必要な学生も存在する。特に、教室前方のモニターと自分の楽器の鍵盤を見比べるのが苦手な学生には、同じ鍵盤上で手本を間近に示すことが大きな助けになる。他人の存在や比較されることがストレスになる学生は、個室で自分のペースで練習することを好むが、最終目標は、保育者や教員として子どもたちの前でピアノを弾いたり歌ったりできるようにすることである。そのためには人前で弾くことに慣れ、それを楽しめるようになる経験も必要である。

適正な人数のクラスであれば、グループレッスンと個人レッスンの併用は、それぞれのメリットを活かし、デメリットを補完し合うことができると考える。学生数や授業環境など、年度により条件は異なるが、限られた授業時間内での最適なレッスン方法を今後も模索していきたい。

注

- 1) 詳細は芦屋大学論叢第 68 号(2017) p.89 (石田愛子「実践的な音楽力を養うためにー『保育内容Ⅵ(表現ー音楽リズム)』での試みー」参照。
- 2) ヤマハ NP-15 (61 鍵盤) および電子キーボード用スタンド L-2 L を採用。
- 3) IPEVO 書画カメラ V4K ベーシックモデルを使用。
- 4) 使用テキストは『2 訂版 歌唱教材伴奏法 バイエルとツェルニーによる』および『改訂 幼児のための音楽教育』(いずれも教育芸術社)。
- 5) 使用テキストは『2 訂版 歌唱教材伴奏法 バイエルとツェルニーによる』(教育芸術社)。本稿での「ステップ」は、芦屋大学論叢第 69 号(2018) p.89 (石田愛子ほか「学生の主体的な学びを支える指導ーピアノ個別指導の場合ー」)のものとは異なる。

参考

- ・小栗祐子『『保育の表現技術』科目におけるグルーブレッスンと個人レッスンを併用したピアノレッスンの試みー学生アンケートの分析を通してー』, 東海学院大学研究年報 3 (2018).
- ・石田愛子・稲葉修子・岩崎智早・柿本久美子・野尻智子・三宅澄子「オンデマンドによるピアノ実技指導の試みーLMS『Pholly』を用いてー」, 芦屋大学論叢第 75 号 (2021).